

ス長とビーム発散角の関係を示された。

第10講は、安田賢司氏ほか2名(富士写真光機)と山口一郎氏(理研)による「フィゾー干渉計用解析装置」であった。干渉計の制御、波面収差解析、光学性能等の計算を高速で行なう自動解析システムを開発され、その概要を発表された。

第11講は、玄間隆志氏ほか4名(トプコン)による「計算機プログラムを用いた非球面形状測定機」であった。近年の非球面光学素子の量産化に伴って、高精度の非球面形状測定技術が必要となっているが、本発表はマイクロオーダーの計算機プログラム原器を用いて、フィゾー型干渉計を基本とした非球面形状測定機を製作さ

れ、 $\lambda/10$ (PV 値)の精度が得られるとの説明であった。

最後は、鈴木孝昌氏ほか2名(新潟大)による「フェーズロック半導体レーザー干渉法による表面形状計測」についてである。鈴木氏らは半導体レーザーの発振波長可変性を利用した新しいフェーズロック干渉計を考案され光学系はトワイマン干渉計を基本として物体表面形状を高精度で測定できることを示された。

シンポジウムはほぼ定刻どおり終え、講演会後の懇親会はやや参加者が少なかったものの、豪華な料理を前に暖かい交流がかわされた。

(1989年7月28日受理)

The First International Workshop on Optical Beam Transformation 参加報告

田 中 一 夫

キャノン(株)研究開発本部 〒211 川崎市幸区鹿島田 890-12

IWBT '89 と称する標記会合が1989年5月10日から17日までの期間、中華人民共和国浙江省杭州市の杭州大学において開催された。

Laser Comm. Opt. Soc. China, Inst. Quantum Electr. Opt. Elect. China と杭州大学 (Hangzhou Univ.)との共催、そして Int. Cent. Theor. Phys., Natl. Nature Sci. Fund. China と Opt. Soc. China との協賛によるものである。

本会合はレーザー光束の変換に関する基礎から各種応用における最近の成果に焦点を合わせた専門会議として行なわれた。

Xie (謝) Tingfan (Vice President, Hangzhou Univ.) の歓迎挨拶, Deng (鄧) Ximing (Shanghai Institute of Optics and Fine Mechanics) の開会挨拶に引き続き、会議が開始された。

参加者数は約30名。一般講演はレーザー共振器、モード伝播、ビーム整形などに関する20件弱、そして招待講演は以下の6件であった。

“Dynamic stability of lasers”

Horst Weber (Technische Univ. Berlin)

“Finite beam width optics”

Deng Ximing (前掲)

“Optical beam control in GEKKO XXII glass laser”

Masahiro Nakatsuka (Osaka Univ.)

“Introduction to GRIN lens systems”

Ichiro Kitano (Nippon Sheet Glass)

“Introduction to advanced matrix optics”

Wang (王) Shaomin (Hangzhou Univ.)

“Gaussian brackets method”

Kazuo Tanaka (Canon Inc.)

小規模の集りであっただけでなく、発表時間に関して招待講演に2時間、一般講演に30分と十分な時間を掛けたため、突っ込んだ議論がなされた。

なお、会期の途中、ICTPのDirectorでありノーベル物理学賞受賞者であるProf. Abdus Salamより会の成功を祝す電報が届いた。

また、最終日に招待講演者と会合事務局は中国科学院上海光学精密機械研究所の激光物理部門を見学する機会が与えられた。

中国情勢が不安定な時期であったためか、米国、フランスそしてイタリアからの参加がキャンセルされたことは残念であった。

(1989年7月29日受理)